『万葉集』における「旅」
―「関山月」の和化について―

井上さやか

1　はじめに

本共同研究のテーマである「旅と万葉集」について、筆者にあてられた役割は『万葉集』中の「旅」の歌の概略をまとめ、基礎資料を提供することであった。本稿ではその一部を提示し、あわせてそこから派生した問題について考えを述べたい。

共同研究の場において、まず求められたのは『万葉集』における「旅」の歌とはどのようなものか、という概略説明であった。周知のとおり、「羈旅」などの題を立てて分類された歌々があり、「旅」という語彙を詠み込んだ歌々がある一方で、いずれにも該当しないが明らかに旅先での詠とみられる歌もある。たとえば官吏が天皇の行幸に従駕した際に詠んだ歌など、「旅」と明示されない例は枚挙に遑がないが、それらの移動を伴う歌を旅の歌ではないと断ずることはできない。一方で、そのような膨大な数の万葉歌をそのまま提示したところで、筆者にかせられた役は果たせないとも思われた。

そこで最低限の話題提供を企図して、万葉歌中における「旅」をはじめとした表記例と、題詞・左注における「旅」の用字例に限定してそれぞれを抽出することにした。それらを基礎資料として他分野の研究者の方々へ提示することによって、あらためて見えてくる問題があるのではないかと考えた次第である。

学際的な共同研究の場において、移動を生活の場とする人々にとって何を「旅」と呼び得るのかなど、何をもって「旅」とするかの概念規定が存外に困難であること、すなわち文化的な背景の違いなどによって「旅」の認識も異なる可能性があること、それによって言語化される「旅」の内容も大きく異なること、などが確認されたといえる。

本稿では、それら多分野からの報告を聞く中で生じた筆者なりの問題意識から、『万葉集』中の遣新羅使人歌群における「旅」の言語化のありようについても考えた。共同研究での資料提供時には詳細を報告できなかったが、派生した内容として小論を附しておきたい。

2　基礎資料と問題点

共同研究の際には、歌中における「旅」をはじめとした表記例、題詞における「旅」の用字例、などの該当する本文すべてを基礎資料として提示したが、ここでは歌番号だけをあげておく。

①歌中に詠まれた「旅」

イ　歌中における「旅」の用字例

１―４６、６７、７５、２―１４２、１９４、３―２５２、４１５、４４０、４５１、６―９２８、７―１１３９、１１６１、１０―２３０５、１２―３１３４、３１４５、３１４６３１５２、１３―３３１５

ロ　歌中における「客」（旅）の用字例

１―５、６９、３―２７０、３６６、３６７、４６０、４―５００、５４３、５４６、６２１、６２２、６３４、６３５、６―９１３、９３０、９４２、９７１、８―１５３２、

９―１６９１、１７２７、１７４７、１７５７、１７９０、１７９１、１０―１９１８、１９３８、２１６３、２２３５、２２４９、１２―３１３６、３１４１、３１４４、３１４７、３１５８、３１８４、１３―３２７２、３２９１、１９―４２５２

ハ　歌中における「羈」（旅）の用字例

３―４２６、４―５４９、５６６、９―１６８８、１２―３１７６、３２１６、１３―３２５２、３３４６、３３４７、３３４７或本歌

ニ　歌中における一字一音（「多日」「多妣」「多鼻」「多比」など）の用字例

１―４５、５７、７―１２３４、１５―３６０７、３６１２、３６３６、３６３７、３６４３、３６４３一云歌、３６６７、３６６９、３６７４、３６７７、３６８６、３７１７、３７１９、３７４３、３７６３、３７８１、３７８３、１７―３９２７、３９２９、３９３０、３９３６、３９３７、４００８、１８―４１２８、１９―４２６３、２０―４３２５、４３２７、４３４３、４３４８〔※多非〕、４３５１、４３７６、４３８８、４４０６、４４１６、４４２０

ホ　その他

１２―３１３３〔去家〕

②題詞などにみえる「旅」

ヘ　「羈旅」

３―２４９題、２７０題、３―３８８題、５―８６４前の書簡、７―１１６１題、７―１４１７題、１２―３１２７題、１７―３８９０題

ト　「行旅」

３―３８１題

チ　「行路」

７―１２７１題

リ　「旅情」

１５―３６６８題

ヌ　「旅心」

１５―３６８１題

ル　「旅愁」

１８―４１３２前文

上記の例を概観する際にまず議論に上ったのは、そもそもなにをもって「旅」の歌と規定すべきなのかということであった。「旅」の文字やことばを含む例に限っても相当数が該当する一方で、そこには行幸従駕歌などの旅先の土地を詠む歌々は含まれてこない。さらに、旅先での風景を讃美する行幸従駕歌の例だけでなく、土地の風習や伝説を詠む例も含むべきではないか。また、羈旅歌の部立もあるが、決してその部立内の歌だけで旅の歌を網羅できるわけでもない。たとえば巻１５は、前半に遣新羅使人歌群、後半に流刑の身となった中臣宅守と都に残された茅上娘子との贈答歌群を収載したいわば旅の歌巻であるが、「羈旅」などの部立名のもとに蒐集されているわけではない。防人歌群にしても同様である。こうして考えていくと、結局は都以外の地で詠まれたと思しき歌を漠然と、膨大に列挙することになってしまいかねない。

かつて伊藤博氏が指摘したとおり、万葉集における旅の歌には家や故郷やそこで待つ妻を思う歌が多いという特徴があるというのには首肯できる。[1] しかし、それだけが旅の歌の条件とまでは言えず、先述のようにさまざまなタイプの「旅」の歌が存在していることは、従来も認識され個別に論が深められてきた。さらに、地方へ赴任中の官吏たちの都を思慕する歌などが、果たして家や妻を思う「旅」の歌と区別されるべきなのか否か、などの問題も派生する。

万葉集中において最も距離が短い「旅」の例を探せば、次の歌群となる。

軽皇子の安騎の野に宿りましし時に、柿本朝臣人麻呂の作れる歌

やすみしし　わご大君　高照らす　日の御子　神ながら　神さびせすと　太敷かす　京を置きて　隠口の　泊瀬の山は　真木立つ　荒山道を　石が根　禁樹おしなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さりくれば　み雪降る　阿騎の大野に　旗薄　小竹をおしなべ　草枕　旅宿りせす　古思ひて

（１―４５）

短歌

阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らめやも古思ふに（１―４６）

ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し（１―４７）

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ（１―４８）

日並皇子の命の馬並めて御猟立たしし時は来向かふ（１―４９）

この安騎野遊猟歌群において、長歌と第一短歌に「旅」が詠み込まれている。いつの作かは明記されていないが、この後に藤原京遷都に関わる歌群が配列されていることからみて、藤原京遷都前の歌と考えられる。飛鳥浄御原宮（奈良県高市郡明日香村）を出発点とするならば、安騎野（奈良県宇陀市大宇陀区一帯）までは直線でおよそ１０kmに満たない距離である。いかに交通手段の限定された古代であるといっても、日帰り程度の行程であったことだろう。しかし、題詞および歌中の表現から安騎野に１泊していることが確認される。共同研究での討議の際には、このことから、距離ではなく宿泊を伴うか否かによって「旅」と認識した可能性が高いことが指摘された。

ほかにも、律令や記紀の記述などから古代日本における「旅」の規定が試みられ、結果的に確認されたのは、上記のことから少なくとも１泊の宿泊を伴うのが古代における「旅」ではなかったかということと、「旅」の文字は本来は軍隊の一団を意味し、記紀などには万葉集のような意味での「旅」の用法はみられないということなどであった。[2] そうであればなおさら、『万葉集』における「旅」の例を抽出し、表現や類題としての用法を概観する意味もあるといえよう。

類題としての「旅」のあり方にも偏在がみられた。先掲の該当箇所をあげると次のようになる。

へ　「羈旅」

柿本朝臣人麻呂の羈旅の歌八首（３―２４９～２５６）

高市連黒人の羈旅の歌八首（３―２７０～２７７）

羈旅の歌一首　并せて短歌（３―３８８・３８９）

宜啓す。伏して四月六日の賜書を奉る。跪きて封函を開き、拝みて芳藻を讀む。心神は開朗にして、泰初が月を懐きしに似、鄙懐除祛して、樂廣が天を披きしが若し。「邊城に羈旅し、古舊を懐ひて志を傷ましめ、年矢停らず。平生を憶ひて涙を落すが若きに至る」は、ただ達人の排に安みし、君子の悶無きのみ。〈後略〉（５―８６４前・書簡）

羈旅作（７―１１６１～１２５０）

羈旅の歌（７―１４１７）

羈旅に思を発せる（１２―３１２７～３１７９）

天平二年庚午の冬十一月に、大宰帥大伴卿の、大納言に任けらえて［帥を兼ねること旧の如し］京に上りし時に、傔従等、別に海路を取りて京に入りき。ここに羈旅を悲傷び、各〻所心を陳べて作れる歌十首（１７―３８９０～３８９９）

ト　「行旅」

筑紫の娘子の行旅に贈れる歌一首［娘子は字を兒嶋といへり］（３―３８１）

チ　「行路」

行路（７―１２７１）

リ　「旅情」

筑前国の志麻郡の韓亭に到りて舶泊して三日を経たり。時に夜の月の光皎々として流照す。奄ちにこの華に対して旅情悽噎し、各々心緒を陳べて聊かに裁れる歌六首

（１５―３６６８～３６７３）

ヌ　「旅心」

肥前國の松浦郡の狛嶋の亭に舶泊せし夜に、遥かに海の浪を望み、各々旅心を慟しめて作る歌七首（１５―３６８１～３６８７）

ル　「旅愁」

更に来贈せる歌二首

驛使を迎ふる事に依りて、今月十五日、部下の加賀郡の境に到来る。面蔭に射水の郷を見、戀緒は深海の村に結ばゆ。身は胡馬に異れど、心は北風に悲しぶ。月に乗じて徘徊り、かつて為す所なし。稍く来封を開くに、その辞云々とあるは、先に奉る所の書の、返りて畏る、疑に度れるかと。僕嘱羅を作し、且使君を悩ます。それ、水を乞ひて酒を得るは、従来より能口なり。時を論じ理に合はば、何ぞ強吏と題さむや。尋ぎて針袋の詠を誦するに、詞の泉酌めども渇きず、膝を抱きて獨り咲ひ、能く旅の愁へを蠲く。陶然として日を遣り、何をか慮らむ、何をか思はむ。〈後略〉（１８―４１３２・４１３３）

ヘ「羈旅」といった旅そのものを意味する語のほかにも、それぞれ孤例であるホ「行旅」・チ「行路」・リ「旅情」・ヌ「旅心」・ル「旅愁」の熟語が用いられている。

ホ「行旅」は、従来たびびとを意味する語として理解されている。筑紫娘子が某人に送った歌であり、家を思うことと旅路の難を詠み込んでいる。チ「行路」は、巻７の「寄物発思」と「旋頭歌」との間に位置する類題の一種としてある。他に例をみないが、歌は家に待つ妻のもとへ早く帰ろうという内容であり、ヘ「羈旅」と同様の意味で用いられていることが確認できる。巻１４―３４４１に重出する歌である。

残るリ「旅情」・ヌ「旅心」・ル「旅愁」はいずれも類題ではなく、題詞中の描写の一部である。同様に題詞中にある例には「羈旅」の場合にもあった（５―８６４前の書簡、１７―３８９０題詞）が、ここではことに「情」「心」「愁」の文字を伴う特異な熟語を用いている点で、他の例とは一線を画すと思われる。

ル「旅愁」は、文字通り旅の愁いを表現するが、この題の下に展開するのは「針袋」をモチーフとした単身赴任の翁を表現する歌であり、愁いというよりはむしろどことなくユーモアさえ感じられる

やり取りとなっている。現代において万葉集の羈旅歌などを論じる際に、この〈旅愁〉ということばが一般に用いられるのは、家の妻や故郷を思う歌の総体を現代語の〈旅愁〉に該当するとして理解することであるだろう。しかし、万葉集中において実際に使用されているのは当該箇所のみである。

そして、リ「旅情」・ヌ「旅心」はいずれも遣新羅使人歌群中に見出せる例である。「旅情」「旅心」によって何が表されているのか。この題詞の表現とその下に集められた歌の表現内容について、以下に注目しておきたい。

3 「旅情」「旅心」の契機

前掲のとおり、ひとまず「旅」に限定して万葉集中の例をあげてみた結果、筆者の関心は遣新羅使人歌群に引き寄せられた。それは、題詞において「旅情」「旅心」などの特異な漢語が用いられている点と、歌中において「旅」の語を詠み込む頻度が高い点に着目した結果である。

先掲のとおり、ニの歌中における一字一音の用字例として、巻１５からは１７例が抽出できる。そのうち遣新羅使人歌群から次の１３例が見出せる。なお、左注などに作者名が記されている場合は、（　）内に掲出した。

白栲の藤江の浦に漁する海人とや見らむ旅行くわれを（柿本人麻呂　１５―３６０７）
あをによし奈良の都に行く人もがも　草枕旅行く船の泊告げむに（大判官　１５―３６１２）
家人は帰り早来と伊波比島斎ひ待つらむ旅行くわれを（１５―３６３６）
草枕旅行く人を伊波比島幾代経るまで斎ひ来にけむ（１５―３６３７）
沖辺より船人のぼる呼び寄せていざ告げ遣らむ旅の宿りを（１５―３６４３）
　　一云　旅の宿りをいざ告げ遣らな
わが旅は久しくあらしこの吾が着る妹が衣の垢づく見れば（１５―３６６７）
旅にあれど夜は火燭し居るわれを闇にや妹が恋ひつつあるらむ（大判官　１５―３６６９）
草枕旅を苦しみ恋ひ居れば可也の山辺にさを鹿鳴くも（大判官　１５―３６７４）
秋の野をにほはす萩は咲けれども見るしるしなし旅にしあれば（１５―３６７７）
旅なれば思ひ絶えてもありつれど家にある妹し思ひがなしも（１５―３６８６）
旅にても喪無く早来と吾妹子が結びし紐は褻れにけるかも（１５―３７１７）
草枕旅に久しくあらめやと妹に言ひしを年の経ぬらく（１５―３７１９）

「旅行くわれ」や「旅にしあれば」など、作中に客体化された「旅」が詠み込まれる一方で、その多くが無記名歌である。それは、旅中の当事者が我でもあり彼でもあるということを示しているのではないだろうか。すでに指摘されてきたとおり、この歌群は「実録風な創作（ドキュメンタリ・フィクション）」ともいえる虚構性を有するといえる[(3)]。虚構とする見方への批判もあるが、編纂過程における整理や潤色の痕については、おおむね認められているといってよいだろう。「旅」の語の多用傾向も、そうした虚構的な性格に深く関わるのではないかと考える。

また、題詞に「旅情」「旅心」とある例を掲出すれば次のとおりである。

筑前国の志麻郡の韓亭に到りて舶泊して三日を経たり。時に夜の月の光皎々として流照す。奄ちにこの華に対して旅情悽噎し、各々心緒を陳べて聊かに裁れる歌六首
大君の遠の朝廷と思へれど日長くしあれば恋ひにけるかも（１５―３６６８）

右一首大使

旅にあれど夜は火燭し居るわれを闇にや妹が恋ひつつあるらむ（１５―３６６９）

右一首大判官

韓亭残の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日は無し（１５―３６７０）

ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて来ましを（１５―３６７１）

ひさかたの月は照りたりいとまなく海人の漁は燭し合へり見ゆ（１５―３６７２）

風吹けば沖つ白波恐みと残の亭に多数夜そ寝る（１５―３６７３）

肥前國の松浦郡の狛嶋の亭に舶泊せし夜に、遥かに海の浪を望み、各々旅心を慟しめて作る歌七首

帰り来て見むと思ひしわが宿の秋萩薄散りにけむかも（１５―３６８１）

右一首秦田麻呂

天地の神を祈ひつつ吾待たむ早来ませ君待たば苦しも（１５―３６８２）

右一首娘子

君を思ひ吾が恋ひまくはあらたまの立つ月ごとに避くる日もあらじ（１５―３６８３）

秋の夜を長みにかあらむ何そここば眠の寝らえぬも一人寝ればか（１５―３６８４）

足姫御船泊てけむ松浦の海妹が待つべき月は経につつ（１５―３６８５）

旅なれば思ひ絶えてもありつれど家にある妹し思ひ悲しも（１５―３６８６）

あしひきの山飛び越ゆる鴈がねは都に行かば妹に逢ひて来ね（１５―３６８７）

これらの例では、ともに題詞において作歌の状況が描写されている。そこには、「月の光」や夜間に「海の波を望」んだことが、「旅情」や「旅心」の起きた契機として述べられている。これらは万葉集中において決して普遍的な作歌契機ではない。そうであるとすれば、「旅情」「旅心」といった特異な語彙を用いることと、「月の光」や夜間に「海の波を望」むこととは、何らかのいわれが通底する、いわば共鳴関係にある表現であるという可能性が考えられる。

また、題詞のそうした表現性に比して収集された歌の表現は、「家」やそこで待つ「妹」「妻」を思い旅の難渋を嘆くという、従来指摘される「旅」の和歌表現の蓄積の中にある。つまりは、それらをことさらに「月の光」や夜間に「海の波を望」むことと結び付け、それらを「旅情」「旅心」を惹起する契機として意味づけたと考えられる。

では、そこになぜ「月の光」や夜間に「海の波を望」むことを描く必要があったのだろうか。繰り返しになるが、それらは万葉集中で特異な例である。そこで、万葉集以外にも目を向けて手がかりを探してみると、次のような例がある。

五言。與朝主人。一首。

鐘鼓沸城闉。戎蕃預國親。

神明今漢主。柔遠静胡塵。

琴歌馬上怨。楊柳曲中春。

唯有関山月。偏迎北塞人。　（『懐風藻』２６　釈弁正）

この詩には、「関山月」が詠まれている。これは『楽府詩集』の「横吹曲」の一つであり、元来は

行軍の際の馬上曲であった[4]。辺境の「塞」を越えていく旅人の心中を悲しむ曲で、軍歌の一種ではあるが、異国の地での望郷が主題である。「琴歌馬上」とは、同じく馬上で演奏された琵琶曲「王昭君」を踏まえた表現であると考えられ、和親のために異国へ嫁がされた皇女の悲しみを歌う内容が想起される。「楊柳曲」も同様に送別の曲である。総じて、楽府詩をモチーフとした機知に富む一首であるという[5]。

釈弁正は『懐風藻』中の伝に「性滑稽。善談論。」とあり、弁舌に長け正しい道理を婉曲に示すことのできる才を持った人物であったと目される。そのような人物が、どのような意図で誰に宛ててこの詩を詠んだかについては諸説があるが、ここでは「関山月」が望郷のモチーフであること、それが最古の日本漢詩集に収載されていることを確認しておきたい。

そこで次に、その「関山月」の代表的な例をあげると、次のとおりである。

朝望清波道　夜上白登臺
月中含桂樹　流影自徘徊
寒沙逐風起　春花犯雪開
夜長無與晤　衣單誰為裁　（『藝文類聚』第四十二巻楽部二・楽府「關山月」梁元帝）

北京図書館蔵宋刊本『楽府詩集』によれば、同詩の後に２０首以上もの同題詩が展開されている[6]。それほど一般的な詩題であったことがうかがえる。そしてこの「関山月」というテーマは、『玉台新詠』でもくり返し詠まれている。たとえば次のような一例がある。

明月照高楼　流光正徘徊
上有愁思婦　悲歎有余哀
借問歎者誰　言是宕子妻
君行踰十年　孤妾常独棲
君若清路塵　妾若濁水泥　（『玉台新詠』巻２「雑詩五首　其一」曹植）

昭昭素明月　輝光燭我床
憂人不能寝　耿耿夜何長
微風吹閨闥　羅帳自飄颺
覧衣曳長帯　履履下高堂
東西安所之　徘徊以彷徨
春鳥向南飛　翩翩独翺翔
悲声命寿匹　哀鳴傷我腸
感物懐所思　泣涕忽霑裳
佇立吐高吟　舒憤訴穹蒼　（『玉台新詠』巻２「楽府二首　其一」魏明帝）

こうした楽府「関山月」をモチーフとした詩は、女性の詩集ともいうべき『玉台新詠』においても多くの例を見出すことができる。

これらのことから、中国詩文においては、月の光を仰ぎ見ることで独閨や望郷の思いが喚起されたといえるであろう。そうであればこそ、次のような安倍仲麻呂の有名な望郷歌についても、なぜ「月

を見て」歌を詠む必要があったのかがわかるといえるのではないだろうか。

唐土（もろこし）にて月を見てよみける　　安倍仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも

この歌は、「昔、仲麿を唐土に物ならはしに遣はしたりけるに、あまたの年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、この国より又使ひまかりいたりけるに、たぐひてまうできなむとていでたちけるに、明州といふ所の海辺にて、かの国の人うまのはなむけしけり。夜になりて、月のいとおもしろくさしいでたりけるを見てよめる」となむ語り伝ふる。

（『古今和歌集』巻九・羇旅・四〇六）

ここでは、それが事実か否かはともかくとして、「夜になりて、月のいとおもしろくさしいでたりけるを見てよめる」という詳しい作歌状況をも記していることが注意される。こうした状況設定と、遣新羅使人歌群の題詞に「時に夜の月の光皎々として流照す。奄ちにこの華に対して旅情悽噎し、各々心緒を陳べて聊かに裁れる」（１５―３６６８題）と表現されることとが、「月」を仰ぎ見る点を介して通底していると思われる。

また、同じく遣新羅使人歌群には、「海辺にして月を望みて作る歌九首」（１５－３６５９～３６６７）があり、月も海も一首も詠まれない歌々と題の齟齬が問題視されてきた[7]。この場合にも、「海辺にして月を望む」ことによって喚起されるのが望郷であるという漢詩文の知識を根底に置くことで、題の意図を理解することができるのではないだろうか。

日本漢詩においては、先の釈弁正に「在唐憶本郷一絶」（『懐風藻』二七）があることも忘れてはならない点である。前掲の「與朝主人一首」もまた、望郷の楽府詩句をふんだんに詠み込んだ作であった。釈弁正の残した２首はいずれも、望郷をモチーフとした詩であるといえよう。

そして、「望海浪」については、左注に「望蒼海」とある例（『万葉集』17 三九五六・秦八千島）もあり、同じ秦氏の２人が、奇しくも同じく「海を望む」ことを契機として望郷の念を詠んでいる。

中国詩文には次のような例もある。

開春獻初歳　白日出悠悠
蕩志將愉樂　瞰海庶忘憂
策馬步蘭皐　緤控息椒丘
採蕙遵大薄　搴若履長洲
白華縞陽林　紫蘺曄春流
非徒不弭忘　覽物情彌遒
萱蘇始無慰　寂寞終可求　（『藝文類聚』第二十八巻人部十二・遊覽「東山望海詩」）

この望海詩においては、直接に「旅」の愁いを含むわけではないが、海の眺望が忘憂の景であることなどが表現されている。

また、遣新羅使人歌群の題詞中にみられた「旅情」や「旅心」という語は、中国詩文において次のように用いられている。

露色已成霜　梧楸欲半黄

鷲去閣恆靜　蓮寒池不香
夕烏飛向月　餘蚊聚逐光
旅情恆自苦　秋夜漸應長　（『藝文類聚』第三巻・歳時部上・秋「秋日詩」梁鮑泉）

旅心已多恨　春至尚離群
翠枝結斜影　綠水散圓文
戲魚兩相顧　遊鳥半藏雲
何時不憫默　是日最思君　（『藝文類聚』第三巻・歳時部上・春「孺寄郷友詩」梁王僧）

これらにおいて、「旅情」や「旅心」は苦しみや恨みといった感情と密接に結びつけられていることがわかる。それが秋の夜の月の光とともに描写されている点も、遣新羅使人歌群に通底する「旅情」をうかがわせる。

ただし、中国詩文における「旅」の例において、万葉集のように「家」や「妻」を思う歌だけが目立つとは言い難い。たとえば、『文選』の「旅」の詩の筆頭にあげられる「行旅」においては、「河陽県作二首」などのように、任地での重責を誇り使命感に燃える志を述べる場合も多い。

このようにみてくると、遣新羅使人歌の一部には、中国詩文の「関山月」を和化した作歌契機を表現した題詞が存在すると考えられる。それが和歌そのものの表現と直接結びついていないのは、和歌の蓄積の中に生じる表現類型と中国詩文の表現類型における相違によるものと、現段階では考えておきたい。

5　おわりに

本稿では、まず『万葉集』中の「旅」に限定して用例を抽出し、概略をまとめた。そして、そこから生じた問題点として、遣新羅使人歌群における「旅情」「旅心」に関して考えるところを述べた。

本共同研究に関連しては、ほかにも旅の描写における地名の役割について論究する必要があると感じている。日本の道行歌のように地名を列挙する例が他にないこと、ドイツのメルヒェン中では旅をするという状況設定が重視されていても旅先の地名が提示されないこと、インドの歌謡中には特定の地名が特定の意味を表すために挿入されているらしいことなど、さまざまな地名の提示のありかたがうかがえる。今後の研究課題としたい。

(1)　伊藤博「古代和歌と異郷」『抒情の伝統』1979年2月（『万葉のいのち』所収）
(2)　本共同研究中の、松尾光元万葉古代学研究所副所長（同名誉研究員）による「『律令』・『風土記』・『霊異記』にみる旅」、大館真晴万葉古代学研究所主任研究員（当時）による「『日本書紀』にみる天皇の移動表現―「幸」・「巡」―を中心に」などの報告に拠る。
(3)　大濱厳比古「巻十五」『万葉集大成　4訓話篇下』1955年2月、伊藤博「万葉の歌物語―巻十五の論―」『万葉集の構造と成立　下』（塙書房）1974年、など。
(4)　小尾郊一・岡村貞雄訳注『古楽府』（東海大学出版会）1980年2月
(5)　胡志昂「最盛期の遣唐使を支えた詩僧・釈弁正」『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』9号、2010年3月
(6)　中津濱渉『樂府詩集の研究』（汲古書院）1970年3月
(7)　伊藤博「海辺にして月を望む歌―万葉集巻十五旋頭歌の論―」『国語と国文学』65-1号、1988年12月